

The Membership of the National Museum of Modern Art, Kyoto

京都国立近代美術館
友の会会報

2005
EARLY SPRING
第3号



河井寛次郎 鉄楽笹絵喜字鉢 1935年

展覧会の

見どころ

河井寛次郎展——川勝堅一とコレクション

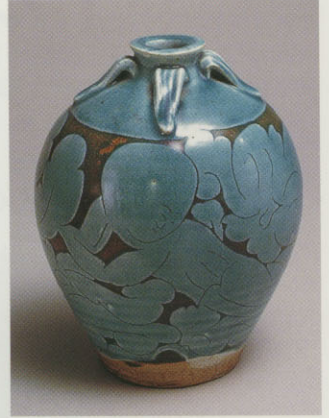
2月22日〔火〕—4月3日〔日〕

(休館:3月21日を除く毎月曜日及び3月22日〔火〕)

昭和35年に出版された『高島屋50年史』に、日本画家の鏑木清方が「美術部との私事」という小文を書いている。清方は大正10年(1935)東京の京橋南伝馬町に当時あった高島屋東京店で、「雪十題」というテーマで初めての個展を開いた。そして、「この個展の案内状を時の宣伝部長川勝堅一さんがかいてくれた」こと、そしてこの個展の招待宴で、笹川臨風がその名文を絶賛したこと、川勝氏はまだ30歳にも届かぬ白面の青年だったこと、などを画家は語っている。

この同じ50年史に、河井寛次郎も小文を寄せていて、やはり大正10年に東京の高島屋で作陶展を開き、30歳にも満たぬ川勝氏に初対面、陶器の話に火花が散ったと書いている。河井寛次郎と川勝堅一の生涯変わらぬ交友は、この時生まれた。河井も未だ31歳の若き陶工であった。川勝堅一は、この大正10年の高島屋での個展以来、寛次郎作品の収集を始めている。

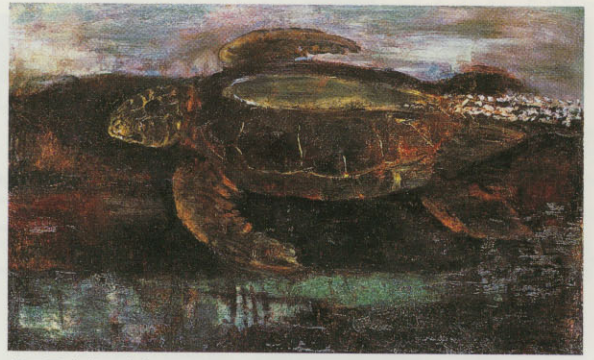
「この川勝コレクションについて、結果として言えることは、河井作品の初期から最晩期までの仕事の全貌を物語るといった年代作品字引みたいなものである。そして、これは、川勝だけの好きこのみだけでなく、時として、河井自身からが川勝コレクションのために作り、また、選んだものも数多いのである。作家自身として、誰が何と言おうと好きなもの、作家が心刀彫身の辛苦を重ねて、ようようの思いに近いものが焼き上がった初窯初産のもの……それは、作り馴れて自由自在に仕上がった作よりも、倍々の悦びらしい……いずれにしても、この川勝コレクションは、まさに、河井・川勝二人の友情の結晶と申してよいと思う。河井さんの晩年は、会うたびに、ことさらに、「したい仕事は山ほどある、川勝コレクションの充実もいよいよこれからだよ」とからだを躍らし目を輝かせていたのに…」(京都国立近代美術館展覧会カタログ『陶工・河井寛次郎展』1968年より)。川勝堅一のこの言葉に、川勝コレクション形成の事情はほぼ尽くされている。優れた作品は、外にも多く遺されているが、初期から晩年までの作陶を、きわめて高いスタンダードによって観ることのできるコレクションは、当館の川勝コレクションを措いてはないだろう。



孔雀緑人形図壺 1923(大正12)年

河井寛次郎は昭和41年(1966)に七十六歳の生涯を閉じた。翌年の5月から6月にかけて、東京高島屋、大阪高島屋、倉敷の大原美術館で遺作展が開かれたが、その翌年の昭和42年、川勝堅一は400以上にのぼる河井寛次郎のコレクションを、4年前に国立近代美術館京都分館として発足し、昭和41年に京都国立近代美術館として独立したばかりの当美術館に寄贈をされたのであった。当時、川勝氏は河内安堂に、古い民家を移築し「亦楽荘」と名付けた、閑居に住んでおられた。大和川沿いの丘陵にはブドウ畑があり、川勝邸の裏の畑でも、秋には、たわわな収穫があった。この閑静な安堂の家に展示空間を設けて、河井寛次郎の作品を展示し、そこを訪れる人々に悦びを与えることも、むろん出来た。しかし、川勝堅一はそれらの作品を熱愛するが故に、寛次郎の制作活動の場であった京都こそ、作品の展示場所としてふさわしいと考え、広く社会へ還元する意味からも、京都国立近代美術館への寄贈を決心されたのであった。生前、二人は「どちらが先に死んでも、このコレクションは生き残ったもの意思にまかせよう」と話し合い、約束をしていたということである。当時館長であった今泉篤男(故人)は、このコレクションの常設展示室の設置を考えたが、果たすことができず、現在のような常設コーナーが設置できたのは、ようやく、それからほぼ20年後の昭和61年(1986)、新館完成時のことであった。

なお、川勝堅一氏は昭和54年(1979)5月他界した。



須田国太郎 海亀 昭和15年(1940年)

名作のふるさと—京都市動物園

左京区岡崎の京都市動物園は明治28年、京都で開催された第四回内国勧業博覧会に際して、会場内に設置された動物館が、その原型であったと思われる。明治28年6月に発行された『風俗画報』第94号(東陽堂・編集者野口勝一)は、この博覧会の特集号であるが、そこには次のように、当時の岡崎を描写した記事が残されている。「京都上京区聖護院の東岡崎町に建設せらるる此地は昔白河と称し歴史上著名の地なり一時は繁華を極めしが星移り物換り漸く園圃に変じ久しく蕪菁の名所として知られたりき今回博覧会会場の建設によりて再び旧時の繁華を見るに至れり…会場は南に向ひ前は疏水工事によりて琵琶湖の水を湛へ東には洛東一帯の連山翠滴らむと欲し西には鴨河の流水白練を曝せるに似たり背ろは遙かに洛北の諸山を雲煙の間に望む帝国のヴェニスとして知られたる京都は更に一層の光彩を添へたりと言ふべし…」。そして、各施設の説明が続いている。動物館については、短かくこう書かれている。「動物館。一棟。此建坪六百坪。此館は馬、牛、豚、鶏等の動物を陳列する所なり…」と。珍しい動物の展示というより、物産館あるいは農業館という感じである。ただ、位置は、綴じ込みの博覧会場略図を見ると、現在の動物園の場所とほぼ一致している。京都市動物園として、本格的に事業を開始したのは、この8年後の明治36年(1903)、大正天皇の御成婚を記念しての建設で、「京都市記念動物園」と称した。※蕪菁は「かぶら」「聖護院かぶら」とも呼ばれた。(筆者註)

恐らく読者は、ここに述べられている岡崎の描写が、100年前のそれと少しも変わらないことに気付かれたと思う。岡崎は、この勧業博覧会によって、六勝寺が並び建ち、八重の塔が聳えていたと言われる、平安末期・鎌倉初期の繁華を回復し、岡崎公園として、今日まで、京都の重要な文化ゾーンを成しているのである。いわばここは、博覧会跡地なのである。

花鳥画を京都の日本画が主要なジャンルとしている

ことは周知の通りだが、目前にいる小鳥や小動物以外の、虎や獅子、象、美しい金鶏や孔雀となると、長い間想像上の動物に過ぎなかった。近代に入っても、例えば、外国から来たサーカスの小屋に通って、身体が変調を来す程、写生に熱中した岸竹堂や、1900年のパリ万博視察の際、ロンドンの動物園でライオンを写生した竹内栖鳳(1900年当時の雅号は棲鳳)など、画家の苦心は大抵なものではなかった。画家が自由にそれらの珍獣を画くことができるようになったのは、大正時代以降のことであろう。昭和2年の第6回国画創作協会展に榊原紫峰が出品した「獅子」は、動物園を散歩していた際、紫峰が偶然目撃したライオンの姿と生態がモチーフとなっているし、戦後の花鳥表現に斬新な局面を開いた山口華楊の「黒豹」も、動物園でのスケッチを基にしている。柔軟な豹の動きは、何度も動物園に通って観察しなければ、得られないものであつたらう。その他、多くの京都の日本画家が動物園から受けた恩恵は数えれば際限がないほどである。

動物園の動物によって名作を残しているのは、日本画家だけには限らない。京都市動物園に近い、南禅寺草川町に住んだ洋画家須田国太郎も、彼の作品のモチーフの多くを動物園で得た。哺乳動物だけではなく、鳥や亀もしばしば画いている。ここに掲げる「海亀」もその一つである。昭和14年から15年にかけて、二枚画いた動物園のアオウミガメの一枚で、この方は、昭和15年の第10回独立展に出品された。年老いた亀は、甲羅に苔が生え、全体に黒ずんだ印象だったという。狭い水槽に、窮屈そうに巨体を浮かべている海亀を、画面のやや上方に構図を取って、広い海原を泳ぐ姿を連想させようとした。須田は動物園で写生するうちに、檻に掲げられている鳥や動物の図に誤りがあることを発見し、自ら図板を書き直すようなこともあつたらしい。

(加藤類子)

戦前の前衛—川西英旧蔵資料を中心に



当館も、現在の新館になってから18年が経過し、所蔵作品を順次紹介してきた4階の常設展示も、そろそろ見直しの時期にさしかかってきました。近隣の規模の大きな新設美術館などと比較しても、常設展示室が4階だけという手狭な印象は避けられませんが、それでも当館の最大の特徴は、開館以来40余年にわたって蓄積されてきた、工芸・絵画・写真・版画・彫刻など、わが国の近代美術を語る上でも欠かせない所蔵作品の層の厚さにあります。

そして本年から、「常設展示」という名称も改め「コレクション・ギャラリー」とし、さらに新たな小企画も立ち上げました。その第一弾が、「戦前の前衛 川西英旧蔵資料を中心に」です。

この小企画では、作品以外にも数々の貴重な資料が美術

の展開を雄弁に物語ることを紹介し、関西の版画界でも重きをなした川西英の、主に戦前の収集資料を中心に「前衛」をテーマに構成しています。わが国の「前衛」動向を振り返る上で見逃せない、今では入手困難な雑誌『マヴォ』や恩地孝四郎の『飛行官能』、『柳屋』や『新版画』『版芸術』などの版画雑誌に、館所蔵の村山知義《サディスティッシュな空間》や野島康三の写真作品他を加え、戦前の「前衛」に光をあてます。

京都迎賓館 その人と形展

当館の一階展示ロビーにおいて、3月15日(火)―18日(金)の4日間に限り、本年京都御苑内に開館する京都迎賓館(仮称)の建設に際して用いられた、伝統的な建築や工芸の技術を紹介する展示会が開かれます。京都迎賓館の建築模型とともに、飾り棚、椅子など、納品される調度品が展示されます。また、タペストリーや製作工程を紹介する写真パネルも展示されます。開館時間は午前9時30分―午後5時(入場は4時30分まで)、入場は無料です。この展覧会の主催者は内閣府、京都国立近代美術館、国土交通省近畿地方整備局、平安建都1200年記念協会です。

友の会の催し(予定)

記念講演会

平成17年3月19日(土)午後2時から
 於:本館一階講堂
 講演:「川勝コレクションと河井寛次郎」
 講師:松原 龍一 当館主任研究官
 無料。但し、会員証を受付にて提示して下さい。

ワークショップ・美術作品の表装

表装あるいは表具という仕事は、これまで作品を陰で支える、いわば縁の下の力持ちとして、地味な役割を担って来ました。しかし、表装の必要そのものが少なくなる時代背景を受けて、この業界の抱いた危機感と努力の結果、表装は人々の関心

を引くようになっていきます。作品の裏打ちなどは、最近では、カルチャーの講座などでも行われていますが、今回は「村上華岳展」という格好の機会でもあり、表装において重要な材料となる、裂地の取り合わせを中心に、二回に亘り実演を行う予定です。参加は無料ですが、会員証を提示して下さい。

■平成17年4月29日(金・祝日)午後2時から4時
 於:本館一階講堂
 「村上華岳の作品と表装」
 京都表装協会会員による講話および実演

■平成17年5月15日(日)午後2時から4時
 於:本館一階講堂
 「近・現代の日本画作品と表装」
 京都表装協会会員による講話および実演

- 開館時間
午前9時30分～午後5時(入館は午後4時30分まで)
- 夜間開館
4月15日(金)―9月2日(金)までの企画展開催中の金曜日
午前9時30分～午後8時まで(入館は午後7時30分まで)
- 休館日
毎週月曜日(月曜日が休日に当たる場合は、翌日が休館)、及び年末年始
(開館時間、休館日は臨時に変更する場合があります)

※お車でお越しの場合 岡崎公園駐車場(地下)をご利用の有料入館者は、駐車場の割引(1台1名)を受けられますので、駐車券をお持ちの上お越しください。

交通案内



独立行政法人国立美術館

京都国立近代美術館

The National Museum of Modern Art, Kyoto

〒606-8344 京都市左京区岡崎円勝寺町
 TEL. 075-761-4111

テレフォンサービス 075-761-9900

ホームページ <http://www.momak.go.jp>